

はじめに

——本書の内容と構成——

2013年3月末に千葉県公立高校を退職した。37年間の教員生活であった。担当の教科は社会（地歴・公民）科で、授業科目は初任の年度を除いて36年間日本史（A・B）を担当した。私は大学・大学院で日本史（特に古代の大化前代史）を専攻しており、日本史は自分の専門科目といえる。しかし、千葉県の高校では社会科教員の配属に専門科目は考慮されておらず、必ずしも毎年専門科目を担当できる保証はない。その点、私はラッキーだったともいえるが、同僚の先生方の厚意と配慮によって日本史を担当しつづけることができたと考えている。お蔭で、毎回の授業の反省を次年度の授業に活かすことができ、愚鈍な歩みだが、授業改善の営みを中断することなく続けることができた（日本史以外には、世界史や現代社会、倫理も担当した）。

私の教員としてのライフヒストリーは、拙共編著『新しい歴史教育のパラダイムを拓く——徹底分析！加藤公明「考える日本史」授業』（地歴社、2012年）に載せたが、転機は教員になって7年目であった。それまでの講義式授業をやめて、生徒が主体的に歴史を考え、相互批判の討論を通じて学び合う「考える日本史授業」を始めたのである。その理由や背景についてはライフストーリーだけでなく、私の初めての実践集『わくわく論争！考える日本史授業』（地歴社、1991年）でも述べた。

そこで紹介したことだが、私の授業を受けていて、優秀で、大学で歴史学を専攻した生徒がいた。その生徒が、大学生になって右翼団体に所属し街宣車で活動するようになったのである。期待していただけに、そのことを知って私は苦悩した。なぜそんなことになってしまったのか。そして、それまでの自分の一方的な講義式授業に根本的な問題点があることに気付いたのである。

むろん、生徒が、ましてや卒業して成人になった後に、どのような思想や政治的信条を持って活動するかは基本的に個人の自由である。私がショックを受けたのはその点ではない。拙著で私は次のように書いている。「東洋史がテーマだという彼の卒論に話が及ぶと、きわめて乱暴な歴史観と一面的な世界認識、最後は15年戦争における日本軍の行動の肯定論まで飛び出す始末で

ある」、「もちろん私は、授業で民衆の働く姿の尊さや、その自然や体制に対するたたかいこそが歴史を前進させる原動力だったことを熱心に説いたつもりだった。15年戦争における日本の侵略性と、それに対するアジアの民衆の抵抗の実態と意義は最も力点を置いた授業のはずだったのである。しかし、それらは結局、彼の生き方と思想になんの影響力も持ちえなかった。どうしてなのか。私はいいようなない無力感の中で、自分の授業について根本的な反省を迫られることになった」。

要は、歴史認識の問題なのである。私が授業で一生懸命に解説した歴史、特に15年戦争像が、その授業を熱心に聞き成績も優秀だった生徒の歴史観や戦争認識にまったく影響を与えていないという事実が、私に根本的な反省を迫ったのである。なので、たとえば、「高校時代、先生から15年戦争は侵略戦争だと習いましたが、私はそのことに疑問を感じて大学でいろいろなことを勉強してそれは違うということに気づきました」というならば、それはそれで私の授業は彼の歴史認識の形成にそれなりの役割を果たしたといえるかもしれない。しかし、私が当時行っていた講義式授業では、私が一生懸命に教えていたことは彼の学び＝認識形成の糧にはなっていなかったのである。

そこで、そのような授業ではなく、生徒が自分の歴史認識を自らの手で作り、討論を通じて互いに検証し、その認識を発達させられるような授業をしようと考えたのである。生徒を歴史認識の主体として成長させることが歴史教育であるとすれば、その担当者としての歴史教師としては至極当然な決意だったのではないだろうか。

こうして、私の授業改革はスタートしたのであり、問題提起の授業と討論の授業を組み合わせる1つの単元（テーマ）の授業を構成する「考える日本史授業」が誕生したのである。その他にも、ライフヒストリーで述べたように、そのような授業こそが、これまでの講義式授業に辟易としていた生徒たちの学習意欲を喚起し、彼らが真剣に歴史を考えるようになっていったということもある。

以来、30年が過ぎた。試行錯誤というよりは悪戦苦闘のなかで「考える日本史授業」はさまざまな実践を生み出していった。そのほとんどを私は自分が所属する歴史教育者協議会の全国大会などで報告したし、3冊の実践集にまとめて出版することができた。2003年には縄文時代の授業（「貝塚の犬の謎を追え」）がNHK教育テレビで放映されたりもした。その結果、多くの方々

の目に触れ、論評を得ることができた。この授業の追試も高校だけでなく、中学校、小学校でも行われるようになった。実践者としては有難いことであり、追試の報告から私が学ばせていただくことも少なくなかった。

しかし、私がいかなる考えのもとで「考える日本史授業」の実践をつくりだしていたのか、また、実践しながら「考える日本史授業」に社会科教育としてどんな意味があると考えたかについては、最初から一定の答えなり確固たる理論的裏付けがあったわけではない。むしろ、生徒の発言や文章などを手掛かりに、歴史学や社会科教育学からの歴史教育に対する提言に学びつつ、自分なりに思考していたのである。そして、それはその時々発表した論文や実践報告で述べていったのだが、本書はそれらを集めたものである。ここから見えてくるのは、「考える日本史授業」を生み出した授業理論形成の軌跡であり、「考える日本史授業」を実践することで照らし出された今後の社会科教育・歴史教育のあるべき発展の方向性である。お読みいただき、ご意見を聞かせていただければと思う。私自身が高校で授業をすることは基本的にもうないが、いくつかの大学で社会科教育論などの教職科目を担当している。これから社会（地歴・公民）科の教師になろうとする学生たちの指導に活かしていきたいと思う。

本書は、目次に示した通り、8章17節と終章の構成となってる。第1章で「考える日本史授業」の概要を提示し、そのような授業論からどのような授業実践が実現するかを第2章で紹介した。第3章から第5章では「考える日本史授業」にまつわる理論的ないしは実践的な問題をさまざまに論じた。教材・教育内容、教科書や評価、歴史教育の系統性などについてである。第6章では、私の徳政一揆の授業をもとに歴史教育と歴史学との関係などについて論じた。第7章では「考える日本史授業」を進めている立場から平和教育のあり方や、国家主義的な歴史教育の問題点を具体的に、そのような意図をもって実践された授業を批判的に分析することで論じた。第8章は大学での教職課程の実践報告である。そして、終章では、次の学習指導要領で全面的に採用されるといわれているアクティブ・ラーニングと「考える日本史授業」の異同を考えた。共に生徒の主体的で協働的な学びを追究しているが、授業のあり方の基本と教育の目的に大きな違いがあるとした。新稿である。

本書の収録した論文・実践報告のなかには四半世紀も前に発表したものもあり、現在の私の考えと相当にズレのある部分もある。それは私にとっては

見解の深化ないしは発展とすべきものだが、その点については各章の最初に載せた【本章を読まれる前に】でなぜそのようなズレが生じたかについて解説を試みた。また、それらの論文・実践報告で述べたことの今日的意味や価値についても【本章を読まれる前に】で触れたので、ぜひお読みいただきたい。

なお、収録にあたって、論文・実践報告は基本的に発表時の文面を尊重した。しかし、原文のままでは意味が通じにくくなっていたり、生徒のプライバシー保護への配慮について今日の水準からすると不十分と思われる箇所もある。その他、誤字脱字なども含め若干の修正をおこなった。学会の機関誌などに載せるにあたって分量制限のために削減せざるを得なかった部分を復活させた節もある。その他、本書全体の統一性をはかるための修正も行った。生徒名は基本的に仮名である。生徒（学生）の発言や文章は要旨や部分のものもあり、そのままでは読者が理解できない表現については著者の判断により手を加えたものもある。